

長野県上田小県地域の植物相研究

川上 美保子*・大塚 孝一**

Research history on the flora of Ueda-Chiisagata district, Nagano prefecture

Mihoko Kawakami and Koichi Otsuka

1. はじめに

上田小県地域（上田市・東御市・小県郡長和町・青木村）は長野県の北東部に位置し、その北東部には四阿山 (2354m)、根子岳 (2207m) を擁する菅平高原が、東部には烏帽子火山群の烏帽子岳 (2065m)、箆の登山 (2227m) などが位置し、南部に美ヶ原、西部に筑摩山地の山々がありそれらに囲まれている。その盆地の中央を千曲川が東から西へ流下している。気候は菅平高原が日本海気候区になり、その中腹より内陸型気候となる。とくに上田盆地（海拔高度は市庁所在地で約 450m）は、年平均気温が 12.1℃、年間平均降水量が約 878.7mm で、県内でもやや暖かで全国でも有数の少雨乾燥地帯である。一方菅平高原（海拔高度は約 1300 m）は、観測期間が若干異なるが年平均気温が 6.1℃、年間平均降水量が 1215.4mm（上田市誌自然編資料 2002）で、寒冷な地である。

上田小県地域の植物相研究は地元の研究者の調査によるもの、著名な研究者が当地を訪れることなどにより、また天然記念物調査、市町村誌自然編の調査、長野県全体の調査の一環としてなされたもの、さらに市民参加による植物調査などで多くの成果を得てなされてきた。『上田小県誌第四巻自然編』（1963）及び『上田小県誌第五巻補遺資料編（2）自然編』（1973）はその成果として総合的に良くまとめられた書籍である。それらの研究成果等について、上田小県地域の植物相研究史としてまとめたので報告する。

2. 上田小県地域の植物研究者

小山海太郎：明治 3 年 (1870 年) に小県郡和村（現東御市和）の生まれで、小県郡祢津小学校、和小学校などで教職につき、83 歳でなくなるまで県内の高等学校等に勤務した。その間県内の植物を調査した。長野県植物誌の植物研究史には、小海町でのツ

キヌキソウ、八ヶ岳でイチョウバイカモ、松原湖畔でシナノアキギリを発見したとあり、シナノアキギリの学名 *Salvia koyamae* Makino は小山に献名されたものである。また、長野県史蹟名勝天然記念物調査報告に植物に関する事項を多数報告している。

倉島賢次郎：本原小学校七十周年記念事業委員会発行の『本原の歴史』（1960）中の明治 26 年度当時 (1893 年) の本原学校在職職員氏名に「倉島賢次郎本原」の名があり、本原（現上田市真田町本原）の生まれで教員をしていたことがわかる。烏帽子岳の植物を 1903 年に 3 回調査し 137 種を採集、「烏帽子ヶ岳植物目録」を発表した（信濃博物誌学雑誌第 7 号 1903 年）。そこにはヒメスミレサイシンも記録されている。

横沢末木・横沢理：横沢末木（図 1）は明治 16 年 (1883 年) 更級郡の生まれで、長野師範学校を卒業後、烏帽子岳のすそ野にある本原村（現上田市真田町本原）の小県郡本原尋常小学校の訓導として赴任した。横沢理はその息子である。横沢末木は 1924 年から 1946 年の間、上田中学で博物学の教師をつとめ、1946 年に上田中学を退職した後 4 年間本原村村長を、その後長野県文化財専門委員などを務めた。学校勤務のかたわら烏帽子山系を中心に植物採集し、その標本 400 点を上田市立博物館に寄贈した。著者の一人川上美保子はその標本を検討し、「横沢末木氏採集植物標本目録」として報告し



図 1 横沢末木、上田市立博物館所蔵

* 川上美保子 〒386-0005 上田市古里 2117

** 大塚孝一 〒380-0952 長野市宮沖 199-1



図2 望月精一、上田市での観察会で
(1973年頃大塚撮影)

た(川上 1997)。そこには烏帽子岳山麓で採集したゲンバイヅル、ツキヌキソウ、シャジクソウなどとともにタデスミレが含まれている。横沢理は、『菅平高原誌』(1990 真田町教育委員会)中、「菅平高原の植物Ⅱ」で根子岳と四阿山の植物、菅平高原中心地帯の植物、菅平湿原附近の植物とに分け、変化しつつある菅平地区の植物分布を記録した。

望月精一：丸子町御岳堂(現上田市)の出身、特にスミレ類を研究し栽培も手掛けた(図2)。『上田小県誌第四巻自然編』の執筆で、植物分野を主導した。また、『上田小県誌第五巻補遺資料編(2) 自然編』の中で、「上小地方のスミレ」をまとめ45種類を記録している。

篠原修：『上田市誌自然編(3) 上田の動物と植物』の植物分野を主導し、編纂に尽力した。執筆は、はじめの概要部分と「独鈷山の植物」を担当し、登山道沿いに見られる植物を解説している。稀少植物として、シナノアキギリ、ツメレンゲ、イワムラサキ、ヒカゲツツジ、ミスミソウなどをあげた。

林一六：昭和14年(1939年)佐久の生まれで、筑波大学教授。菅平高原実験センターに長年勤務した。専門は植物生態学で、世界の草原植生を研究し『植生地理学』を著した。菅平地域の植物遷移を研究し(林 1967)、また「菅平の高等植物目録」を発表した(林・伊藤 1985)。長野県植物研究会の会長を務めた。

3. 明治時代に採取された貴重な植物標本等

2020年3月、東御市北御牧郷土資料館収蔵庫において、岩石標本などと共に古い押し葉植物標本が見つかった(図3)。押し葉標本は、小山とよ子が明治37年に採集したホウチャクソウ以下13

点、明治43年から44年に採集された採集者・採集場所が不明のガズミ以下66点、昭和6年から7年に採集され採集者名が丸山とあるハギ以下67点、その他、採集年・採集場所の記入がない赤尾積太郎採集のイブキジャコウソウ以下26点があり、計172点が丁寧に整理されている。他に学習用教材の理科図集としてまんさく、くさぼけ等の植物画46枚があった。

小山とよ子は小山海太郎の夫人と思われるが、確認ができていない。また、標本情報として採集年月日や採集場所がしっかり記録されているのは、丸山採集の標本である。丸山とあるのは、長野県学事関係職員録で丸山平和であることが確認できた。これらの標本は大変貴重なものとして整理の後、東御市文書館に保存される予定とのことである。標本調査は主に川上が行った。

4. 上田小県地域の植物研究

4-1 烏帽子岳の植物

烏帽子山系には烏帽子岳、湯の丸山、籠の登山などがあるが、特に烏帽子岳は上田盆地から入山しやすかったためか、交通手段が困難な時代から植物採集が行われていた。

倉島賢次郎(1903)が発表した「烏帽子ヶ岳植物目録」には、ヒメスミレサイシンも記録されている。ヒメスミレサイシンは1900年から1902年の間、田中貢一らにより戸隠で採集され、その後牧野富太郎が命名したものである。「信濃博物誌学雑誌第2号」(1902)に、田中貢一のイラストと葉や茎などの特徴を始め、牧野富太郎へ同定を依頼したいきさつなどが記されている。現在、フォッサマグナ要素とされるヒメスミレサイシンは、八ヶ岳観察会(信濃博物誌学雑誌第2号)や四阿山観察会(信濃博物誌学雑誌第8号)では記録されていない。110年経過した現在も烏帽子岳では健在である(図4)。

小県郡祢津生まれの丸山晚霞は、1907年に日本山岳会会員となり信州の山岳に生える高山植物を描き広く紹介した。特に祢津の健事神社に奉納した屏風には浅間連山を含む八ヶ岳や北アルプスなどの高山植物150種を描いている。これらの植物は、写生とはいえ花の色をはじめ葉や茎の形状等現物を忠実に表現していて、植物研究の積み重ねの成果であるといえる。浅間山(群馬県)を基準産地とするゲンバイヅルも描いている。

横沢末木が烏帽子山系を中心に植物採集してきた

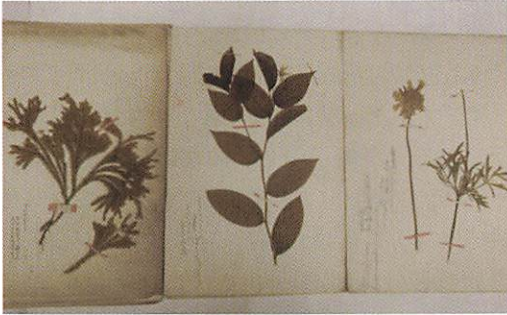


図3 明治時代の植物標本（東御市所蔵）



図4 ヒメスミレサイシン 烏帽子岳（2014年川上撮影）



図5 タデスミレ 水落沢（1970年坂口益次撮影）

図6 タデスミレ押し葉標本 烏帽子岳産
（1947年頃小林武彦採集作成）

なかには、タデスミレが含まれている。タデスミレは葉形がタデ科の葉に似ていることからこの名がある。1910年に倉島賢次郎・横沢末木が採集し、牧野富太郎博士に送り、新品種として和名タデスミレ、学名は *Viola kurasimana* Makino と命名されたことが「小県郡植物標本説明書」（1916年小県上田教育会）に記録されていると、望月精一が『上田小県誌第五巻補遺資料編（2）自然』に記述している。

現在タデスミレ *Viola thibaudieri* Franch. et Sav. は、烏帽子岳山麓と松本市に産するとされている。筆者らは烏帽子岳山麓で発見の機会となった横沢末木の子息横沢理氏の案内で1997年5月に、生育地水落の沢を調査した。その場所は登山道沿いの標高1000mの地点で、かつては散在して生育していたとのことであった。しかし、溪流沿いの附近一帯は鬱蒼と暗くアブラチャン林内でヒナスミレを確認したのみであった。望月精一は頻繁に現地調査し、後世に伝えて欲しいと坂口益次を伴い探索した。その地は水落の沢の上流、標高1200mにあたるという、明るい稜線に点在していたという（坂口益次私信）。

タデスミレについて、1948年頃までは水落の沢の樹林下に個体数も多く産したが、森林の伐採に

よって環境が変わり、現在（1973年頃）はわずかに余命を保っている状態と望月精一が『上田小県誌第五巻補遺資料編』に記述していて、1969年6月5日にタデスミレを撮影した写真が載っている。聞き取りに応じた坂口益次は、タデスミレを1970年に撮影しており（図5）、撮影地である1200mの尾根へ行けば再発見できる可能性を示唆した。図6は、1947年ころ横沢末木が主催する植物採集会に参加した小林武彦（上田市在住）が作成した押し葉標本である。タデ科の葉に似ていることから名前がついたがその特徴がわかる。

4-2 湯の丸高原の植物

『上田小県誌自然編』は、湯の丸山、三方が峯、箆の登山の植物について紹介している。湯の丸山の草原ではヤマドリゼンマイやレンゲツツジの群落があり、三方が峯の湿原は小規模ながら高層湿原になっていること、箆の登山では亜高山帯針葉樹林が形成され、コメツガ、カラマツを主要木としてシラビソ、トウヒなどが混生しているとした。

星山耕一・川上美保子（2013）は池の平周辺の植物を研究し、「長野県東御市池の平周辺の植物相」と題して長野県植物研究会誌第46号に発表し304

種を記録した。さらに烏帽子岳まで調査範囲を広め、川上 (2017) が「長野県東御市湯の丸高原の植物相」として、長野県植物研究会誌第 50 号に発表し 413 種を記録した。

なお、この調査中に烏帽子山系一帯に生育するキク科トウヒレン属の未記載種を確認し、その後、検討を経て門田裕一 (2017) によりトウミトウヒレン *Saussurea mihokokawakamiana* Kadota が発表された。種小名は発見者の川上美保子に献名された。この地がタイプ産地である。川上 (2018) はこの種の発見の経過や特徴などについて長野県植物研究会誌第 51 号に報告した。湯の丸高原には、このほかオニゼンマイ、ミスズラン、ヒメスミレサイシン、コゴメヒョウタンボク、シロバナテンゲノコヅチ、グンバイヅル、シャジクソウ、ヤツタカネアザミ、キバナノアツモリソウ、コセリバオウレン、ミヤマアオスゲなどの他、霧ヶ峰高原がタイプ産地となっているイヌカモジグサが生育する。

4-3 菅平高原の植物

菅平高原には筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所があり、標高約 1300m の高冷地を生かした学術研究・教育の場として機能し、菅平やその周辺地域の植物研究がなされてきた。当施設は 1934 年に東京文理科大学付属菅平高原生物研究所として開設され、1949 年に東京教育大学理学部付属菅平高原生物研究所、1965 年に同生物実験所、1977 年に筑波大学菅平高原実験センター、2017 年に現在の名称になっている。当研究施設の関係者らによる業績が多く、植物標本も収蔵されている。また、菅平高原自然館は菅平高原の歴史や民俗、花や昆虫、小動物などジオラマや標本で紹介していて、それらに関する出版物もある。

4-3-1 維管束植物

菅平研究会が刊行した『菅平その自然と人文』(1964) は、地形地質、気候、動植物、昆虫、人文関係等幅広い内容でまとめられ、菅平の郷土誌となっている。植物関係では、菅平付近の植物相、菅平産高等植物目録の項があり、東京教育大学教授の印東弘玄がまとめている。印東弘玄は、「菅平附近の植物相」として、溪谷林、草原、きよ (藪) 水林、湿原、亜高山きょう (喬) 木林、亜高山かん (灌) 木林、高山性草本帯の植生および亜恒雪帯の植生、人為的植生に分けて特徴などを記述し、四阿山頂付近には数群のハイマツの発生が見られるとした。また、溪谷林に生えるツキヌキソウ、カラフトイバラ、

エゾサンザシなどの希少種が記され、またシバ・ワラビ優占群落の草原植物としてキキョウ、オミナエシ、アズマギク、グンバイヅル、オキナグサなどを挙げている。烏帽子山系の山岳に多く生えているシャジクソウは記録されていない。菅平産高等植物目録では、シダ植物 64 種、裸子植物 15 種、被子植物 780 種の計 859 種類 (品種含む) が記録されている。

1965 年には続編として『続 菅平その自然と人文』が発刊された。植物関係では、「菅平における高等植物の垂直分布」(山崎惇・柳沢俊夫・八幡泰平著)、「菅平湿原の形成と花粉分析」(堀正一著)、「菅平・四阿高原の薬用植物」(県衛生部薬務課著)、「真田町方言抄」(中平解著) が掲載されている。また、印東弘玄は、真田町教育委員会発行の『菅平高原誌』(1990) 中の「菅平高原の植物」で、「菅平高原の植物 I」と題して、根子岳・四阿山の植物分布を横沢末木遺稿の「根子岳・四阿山の植物分布の大観」を図にまとめ、標高別による植物分布を記録した。「菅平高原の植物 II」では横沢理が根子岳と四阿山の植物、菅平高原中心地帯の植物、菅平湿原附近の植物とに分け、変化しつつある菅平地区の植物分布を記録した。またこの項では高山的植生植物、東北日本系要素、日本海系、本州中部産系と区分し、最後に分布が限られたものや特殊なものとしてカラフトイバラ、アオナシ、エゾサンザシ、ハナヒョウタンボク、グンバイヅルを挙げている。末言に菅平高原には植物分布の北限や南限となっている種が目立つとある。

関谷圭史は、『菅平高原の植物 - 観察の手引き -』(1986) を著した。植物の形態や菅平の植物の特徴、季節の植物などを紹介しているが、理科教材として使えるようにまとめられている。菅平自然館のミズバショウは戸隠からもってきたものと明記している。

長野県衛生部薬務課・横内斎は、『菅平植物誌』(1968) を著し、菅平の植物相、菅平産植物目録をまとめている。シダ植物 72 分類群を含む 1090 分類群 (品種含む) を記録した。また菅平産植物と外地の関係として、菅平の植物は日本海地域系も僅かにあるが、暖地系もありまた日本のみの特産も比較的多く、菅平特産のものも数種見られるとした。しかし、圧倒的に多いのは外国、特に大陸との共通種が多いことを菅平の植物の特徴としている。種名と外国の産地を具体的に記していて興味深い。なお、横内文人の菅平高原の森林群落、飯沼彦彦の菅平

の蘚苔類についてのまとめ2編が収録されている。菅平の森林群落としてレンゲツツジ-シラカンバ群集、ハンノキ群集、ハンノキ群集の中にオニナルコスゲ変群集、ケイタドリ群集、オオミゾソバ群集を認めている。蘚苔類についてはクロゴケ、トサカホウオウゴケ、アオシッポゴケなど49種類が記録されている。

清水建美は『カラー自然ガイド山の植物Ⅰ』(1968)で、「菅平のアザミ」と題して新種ヤチアザミ発見の経過を記している。それによると1968年に長野県植物研究会観察会が菅平湿原で開催され、検討の余地あるアザミが広範囲にあることに気づいた。一度はノハラアザミと記録されたが、3年後に新種と結論が出てヤチアザミとされた。その後、県内各地のノハラアザミが再検討され、各地にもヤチアザミがあると認識された。現在、発見地である菅平湿原では、環境の変化が原因だろうか減少し点しているのみである。

黒田辰一郎は、「菅平の薬草」(1976)を著し、菅平の薬草214種について解説した。菅平研究会の分科会として菅平薬草の会が発足し、漢方薬の解説と菅平の薬草について8回にわたる講演会の内容を取りまとめたものである。内容は①薬草についての一般的な知識、②菅平の薬草と歴史と将来、③薬草の説明の項からなり、オケラ、ノアザミ、オタカラコウ、キキョウ、オミナエシなど植物の特徴や薬草としての利用などについて記述がある。

横内斎(1968)は、菅平の植物を紹介し、特に注意すべきものとしてシキンカラマツ、カラフトイバラ、エゾサンザシ、アオナシ、クロビイタヤ及びシバタカエデ、ムラサキセンブリ、ツキヌキソウ、マルバクワガタ、ハナヒョウタンボク、オニヒョウタンボク、アズマヤコゴメグサ、シロバナゲンナイフウロの12種類をあげた。

浅野一男他(1969)は、菅平湿原の植物生態について、植物社会学調査を行い報告した。

林一六(1967)は、菅平地域の植物遷移を研究し、菅平高原生物実験所研究報告に発表した。林一六・伊藤洋(1985)は「菅平の高等植物目録」をまとめ、筑波大学菅平高原実験センター研究業務第89号に発表した。シダ植物と種子植物合わせて1060種が記録されている。注目される種類として、クロミサンザシ、ハナヒョウタンボク、オニヒョウタンボク、ヤマハマナス、シバタカエデ、ツキヌキソウを挙げた。

4-3-2 コケ植物

菅平のコケ植物相研究は、古くTakaki(1943a,b)により5新種を含む15種の報告がなされている。また、飯沼冬彦は1967年8月の4日間、四阿山、根子岳を含む菅平高原のコケ植物を調査し、その結果を、『菅平植物誌』(1968)の中で、「菅平の蘚苔類について」と題して発表し、蘚類45種、苔類4種を記録した。

斎藤亀三は、東京教育大学大学院在学中1968年から1969年にかけて菅平のコケ植物を採集し、「菅平のコケ植物」と題して、菅平高原生物実験所研究報告(4)(1971)に発表した。記録したコケ植物は、苔類85種、ツノゴケ類1種、蘚類242種の計323種である。その内、ヒメギボウシゴケ(新称)、ミドリコモチゴケ(新称)は日本新産となった。フロラの特徴として、御岳のコケ植物フロラに比較的似ているが、菅平では開発が進み、農耕地、牧草地が多く自然林が少ないためにコケ植物フロラが貧弱になっており、特にタイ類では強い影響をうけて種類数が少なく、湿原に生じる種を除けば単純な中部日本の一般的なフロラであるとしている。なお、菅平高原生物実験所研究報告(6)(1974)で、12種を追加報告した。

4-4 美ヶ原高原の植物

横内斎は『美ヶ原の植物』(1968)を著し、その美ヶ原植物目録は、①焼山以北(袴越山、武石峰、焼山)と②美ヶ原(王ヶ鼻、王ヶ頭、茶臼山)、③三城、④鉢伏山塩嶺に分けて示している。山頂部は殆どが標高2000mを越える高原地帯で、山頂部が平坦なため強風の影響をうけて森林がほぼなく、高山植物の残存生育地となっている。高山植物の代表のハイマツをはじめ、ヒメハナワラビ、シャジクソウ、ゲンバイヅル、アカテンオトギリなど稀少種を含んだ高山植物の美ヶ原・鉢伏山における植物数は203種としている。本州の高山植物約600種のうち1/3に及ぶことは驚くべきこととしている。

『上田小県誌第四巻自然編』(1963)には、美ヶ原の植物について628pから641pの14pにわたって記述がある。植物分布と特殊性について、台地の松本側には岩場があり海拔2000mに過ぎないが高山性の植物が多いこと、高原の東部、北部の小県方面は森林が多く温帯性の落葉広葉樹林に続き亜高山性の落葉広葉樹林や針葉樹林が生育するとしている。また、焼山沢登山道の植物を詳しく紹介していて、不動滝付近には暖地性のフジシダの群落があると記述がある。

4-5 上田市岩鼻の植物

上田盆地と坂城町の境界付近に岩鼻がある。千曲川右岸の塩尻岩鼻の大断崖は、太郎山系の西末端で火山岩質の緑色凝灰岩（グリーンタフ）からなり、高さは約 200m ある。左岸の半過岩鼻は玢岩の浸食崖で、高さ約 100m ありほぼ垂直、断崖の真ん中には浸食洞穴が形成されている。頂上の平坦部には旧千曲川河床礫がある。これらの断崖のテラスなどにモイワナズナが群生し、イワカラマツやエゾカワラナデシコも点在して生えている。

小林規甫は「岩鼻の岩上植生」（1965）としてフロラ調査と植生調査の結果をまとめ、42 科 112 種の植物を記録した。岩鼻の岩上植生はエゾカワラナデシコ・イブキジャコウソウ植生群で、下位植生としてジャクシン・ニシキギ、とウシノケグサ植生群と典型植生群があるとした。モイワナズナを産する天然記念物の岩鼻であるが、調査報告も少なくまた保護すべき何らの対策もないため、それらに寄与すべく調査したと記されている。岩鼻はモイワナズナ、イワムラサキのような本州では珍しい種や、岩場特有のチチッパベンケイ、ツメレンゲの多肉植物、ビロウドシダ、イワオモダカの常緑のものなど寒帯、暖温帯のものが入り混じって生育している特殊な場所とした。

清水建美は、自然環境保全地域の候補地の一つとして岩鼻を含む一帯を選び、自然保護上の貴重植物に関する評価基準について、9 項目 5 段階評価法を用いて、構成種の貴重度、植相重要度、荒廃度を評価した結果を、「植物の重要度からみた環境評価の試み」（1982）として発表した。

岩鼻に生える主な種は以下のとおりである。
モイワナズナ（アブラナ科）：小山海太郎によって発見され、長野県史蹟名勝天然記念物調査報告第 2 輯（1924）には、「モイハナズナの産地」として報告されている。「塩尻時報 31 号」（1921）には塩尻村の主要植物として横沢末木が、「もいはなずなどて白い少なる花の咲く一寸見ればつまらない草である鑑賞としてはつまらないが植物学上の分布よりすれば貴重なるものである」と紹介している。「上田市誌自然編（3）上田市の動物と植物」には、「昔は信越線の汽車の窓からも白い花が見えるほどであったという下塩尻の岩鼻では、今は絶滅寸前にまで数が減った」と記述がある。モイワナズナ生育地の岩鼻は長野県天然記念物に指定されている。

池田登志男他（2005）は、「長野県上田市産モイワナズナの生物学」と題し、長野県植物研究会誌第

38 号にこの種類の生育状態、種子の形態、発芽などの種生態的特徴を発表した。モイワナズナは種子による繁殖と走出枝による繁殖の両方を行う種類であること、また北海道産の植物と岩鼻のものを比較し、両者に違いは見出せなかったとしている。『上田小県誌自然編』（1963）には、大井次三郎が藻岩山産と岩鼻山のモイワナズナには形態に相違があると記述している。なお、杉本順一は『日本草本植物総検索誌 I』（1978）で、モイワナズナとカブタチナズナを区別している。門田裕一（2017）は岩鼻の植物を別変種のカブダチナズナとして扱った。

エゾカワラナデシコ（ナデシコ科）：岩鼻産の植物は、強い川風を受け葉や茎が粉白になるためシモフリナデシコやイワナデシコと呼称されたことがあったが、1982 年に調査した清水建美によると「名称が様々であるが、種子を播種して成長した植物を観察するとエゾカワラナデシコであることが分かった」とし、現在はエゾカワラナデシコとして扱われている。

ヨコグラノキ（クロウメモドキ科）：長野県では限られた場所に分布している本種は、1997 年のモイワナズナ保護工事の際には特別に保護策がとられた。しかし、生育地の開発などにより、現在は個体数が極端に減少している。

イワカラマツ（キンポウゲ科）：アキカラマツの変種で、花期が 6 月のためナツカラマツとも呼ばれる。植物体に腺毛が密に生え粘る。果柄が 4-6mm で他のカラマツソウと比べると小さい。栃木県、山梨県そして長野県の岩壁にはえる。半過岩鼻付近は、国道バイパスが通過したため人の出入りも多くなって、希少な植物が育つ環境は変化している。清水建美が提案したように自然環境保全地域指定など何等の手立てが必要かもしれない。

また、清水（1982）は自然環境保全地域候補地学術調査報告書〔虚空蔵山・半過〕をまとめその中で、虚空蔵山、岩鼻、半過の 3 つの調査地について、植生の概要、各地の植生と植相、植物目録を記述した。目録には、虚空蔵山 162、岩鼻 119、半過 149 の維管束植物がリストされている。また、植物相からみた環境評価を行った。

4-6 太郎山及び上田付近の植物（身近な自然を知る冊子）

太郎山（1164m）は上田市の北部にあり、市民に親しまれ登山コースも多い。『上田小県誌第五巻補遺資料編（2）自然編』では、望月精一が太郎山の植

物を詳細に記録した。太郎山の乾燥する南側斜面と北側斜面では植物に違いがあり、北斜面で変化が多いと述べている。南斜面の乾燥地のみか北側より多いものとしてイワデンダ、シノブ、イブキジャコウソウ、ツメレンゲなど、北斜面に多いものとしてサラシナショウマ、サワギク、フタリシズカ、チゴユリ、ウスバサイシンなどをあげた。日本海要素のケイタドリ、キタコブシ、サルトリイバラなどが確認されていることから、更埴地方よりは少ないが日本海区の性格をもつことが分かったと記され、また上田地域の植物は種類が多いこと、亜高山の中程度の標高で高山特有の寒地遺存植物が豊富であることを挙げている。太郎山山系の植物目録をまとめ、シダ植物 19、裸子植物 7、被子植物 392 の計 418 種類を記録した。

上田市立博物館は郷土誌シリーズのひとつとして『郷土の自然 上田附近の植物』(1989)を発行した。担当した林一六は、上田附近に普通に見られる植物 150 種をキク科・マメ科・アブラナ科・ナデシコ科・タデ科等に区分して、写真とともに植物の特徴を解説し、また、「ため池の土手の草花」、「太郎山の樹木」、「街で見かける木」、「春の七草・秋の七草」の項目に分けて植物を紹介している。

上田市立信濃国分寺資料館は、2003 年に『上田地方の万葉植物』を発行した。上田地方の山野に生える万葉植物 50 種を選び、写真と万葉歌を添え解説している。信濃国分寺史跡公園には「万葉植物園」が設置されていて、ボランティアの会が中心に管理・運営をしている。その研修活動として「万葉集」を学んでいるため、ボランティアが表記冊子を撮影・編集した。

川上美保子他が小県上田教育会の研究機関紙「上田・小県」の 129・130 号に「塩田平におけるため池の堤の斜면植生 (1)・(2)」を調査結果として報告した (2002)。182 号 (2015) には、「アザミの話」と題して浅間山系のニッコウアザミについて、189 号 (2017) には「キク科トウヒレン属植物の話」として新種トウミトウヒレンを報告した。

市民の植物グループなどによる身近な植物調査も盛んに行われている。上田の自然保護団体「染屋の森の会」は、子供たちに身近な自然を知って欲しいと願い、写真を中心とした冊子を作成し、該当する地域の子どもたちに贈呈した。2006 年に『塩田平の花』、2008 年に『菅平の花』、2011 年に『太郎山の花』、2016 年に『烏帽子・湯の丸の花』を発行した。2009 年作成・配布した段丘崖の雑木林『グ

リーンベルト』は、緑地の効果として温暖化防止の取り組みを含めた内容で編集は会が担当し、発行は上田市公園緑地課である。

上田自然に親しむ会は 2001 ～ 2005 年に調査し、「太郎山の植物」を作成した。草本 250 種、木本 129 種を写真とともにまとめた目録を上田市立博物館に寄託した。

太郎山陽生会では、太郎山裏参道にて植物モニタリングを 2018 ～ 2019 年の 2 年間実施し、データを発表した。また 2019 年には「太郎山モニタリング観察会」を実施している。

5. 千曲川の植物

池田登志男は、「千曲川の自然の今昔」(千曲 - 郷土の研究 - 第 112 号, 2002) 中、7 千曲川原の植物の変遷をまとめた。昭和初期のころの河原のイメージは砂と砂利と石ころの原であり、部分的には木が茂っているなど、ススキやヨシなどが群生したがそれほど多くはなく、現今では草や木の緑と畑やグラウンドなどの広場がある印象と述べている。主な水辺の植物としてヨシ、ツルヨシなど 30 種類を、また注目すべきものとして、タコノアシ、リュウノヒゲモ、ゴキヅルなどを挙げた。その他、木本類、園芸植物も記述し、河原の植生の特徴とされる帰化植物が多いこともあげた。調査した上田市の河原で帰化植物は 50 種あったこと、そのうち半過付近の河原で記録した 25 種のうち、18 種が帰化種で 72%であったことを記述した。

川上美保子は、上田小県近現代史研究会ブックレット No.8(2001)「千曲川のほとりを歩く」に、「千曲川の植物」と題して、上田市の千曲川において立地環境の違いにより生える植物の種類の相違を報告した。隣地の植物としては右岸で 36 種、左岸で 35 種、両岸の共通種が 21 種 (60%) であった。砂礫地の植物としてはシロバナシナガワハギが多く、砂地にはツルヨシ、ムシトリナデシコが生育していた。湿地の植物はガマ、サンカクイ、アオコウガイゼキショウ、イ、サナエタデ、セリ、マツバイ、カサスゲなどが生育することなどを報告した。

6. 市町村誌等による植物研究

6-1 上田小県誌第四巻自然編

1963 年に『上田小県誌第四巻自然編』が上田小県誌刊行会により刊行された。その時代の上田小県

地域の植物研究の成果が詳しく記録されていて、総合的にまとめた資料として大変重要な出版である。そこに記載されている各地の植物は、横沢末木の資料に基づき山岸実、横沢理、宮越直らと共に望月精一が主担当で記述した。概説を含め 94 頁ある。上田小県地域の植物は、標高 400m から四阿山の 2332.9m と標高差が大きく、低山帯と亜高山帯と二区分あるとしている。分布の限られた植物としてハイマツ、シャジクソウ、エンピセンノウ、タガソデソウ、ツキヌキソウが挙げられている。各地の植物については四阿山系、烏帽子山系、美ヶ原、和田・大門山地、青木滝山、東内・独鈷山と区分し、それぞれの地をくまなく歩いて記録している。また、天然記念物および名木珍草として詳細に紹介している。その後 1973 年に発行された『上田小県誌第五巻補遺資料編 (2) 自然編』に、横沢理・酒井利次両氏による上小地方産植物目録が記述されている。また分布と生態の項では「太郎山の植物」と「上小地方のスマレ」が、望月精一によって詳細に記述されている。

6-2 長野県上小地方のシダ植物

大塚孝一は、上小地方（上田小県地域）のシダ植物を調査し、1974 年に小冊子を出版し 120 種類のシダ植物を記録し標本に基づいた目録をまとめた。地域別に菅平、烏帽子山系・角間沢、美ヶ原・焼山沢、太郎山、独鈷山などの山塊ごとのシダ植物を紹介し、標本写真も載せている。なお、証拠標本は、菅平高原実験センターに収蔵した。小冊子ながら上田小県地方にとって貴重な記録として活用される。

6-3 市町村誌

『上田小県誌』の発行以来、各市町村誌が刊行された。自然編を含む市町村誌は 1967 年の長村誌が最初で、1989 年に東部町誌、武石村誌、丸子町誌、1993 年に青木村誌、1997 年に真田町誌、2001 年に上田市誌が発行された。長村誌は真田町との合併後に長財産区の発起により刊行され、その第四章に植物相として横沢理が山岳、山麓、溪谷、高原、湿地帯の植物を記している。また大洞のブナ林を紹介し、約 100 本のブナの保護に努めたいとしている。

菅平に多く生育するツキヌキソウについては、真田町誌調査員と協力者により菅平以外の生育地を聞き取って、1996 年に山の牧場跡で発見された。2019 年、筑波大学菅平実験所田中健太他 5 名と川

上美保子が再調査したが、森林が繁茂し確認はできなかった。菅平自然研究会は 1997 年に、スキー場で 100 個体以上の群生を発見し、地権者の同意を得て観察とその保護に努めた。その後、2017 年からは筑波大学菅平実験所の田中健太が対応している。長和町のツキヌキソウは教育委員会により保護活動がなされている。

青木村誌自然編では、「青木村の植生」として現存植生図を記載し地域の植物群落が把握できる。「植物の種類と分布」では平地のスベリヒユなどの種子生産量を示し、作物との違いをあげている。他に「水田の雑草」「人家周辺の植物」と区別して、身近な植物に親しめるようにしている。また「山地の植物」では、ブナ林、ツガ林、コナラ林、アカマツ林の構成種を高木層、低木層、草本層に分け子どもも理解できるよう表現している。

『上田市誌自然編』のうち、「上田の動物と植物」が 2001 年に刊行された。内容は「植物区系上の上田市の位置」、「上田らしさを表す植物景観」、「各地の植物」として太郎山、独鈷山などを紹介している。また上田市各地の帰化植物数と帰化率が記載され、今後の上田の自然環境の変遷に参考になる。「貴重な植物」では環境庁のレッドリストに挙げられている種が記されている。「シダ植物」では、上田市のシダは 83 種類としている。この市誌の調査では、佐久地方のみに生育するとされたシナノアキギリやイワムラサキなどが確認された。また自然編資料として上田市産植物目録がまとめられ 1154 種が記録されている。

7. 長野県植物研究での上田小県地域

7-1『長野県の植物』横内斎 (1971)

長野県の植物全体の記述の中で、当地域に関連した事項として、モイワナズナ、エゾサンザシ、シバタカエデ、ハナヒョウタンボク、ツキヌキソウ、イヌカモジグサなどが隔離分布として挙げられている。

上田市本原のアキニレについて本書では隔離分布と記述されているが、近年遺伝子解析によりアキニレとされてきた植物はケヤキであることが判明し、長野県文化財指定は解除された。

7-2『長野県のシダ植物』大塚孝一 (1987)

県内全体のシダフロラを扱っているが、第 6 章主な地域のシダフロラの項で 30 地域のシダを紹介

している、上田小県地域では、真田町菅平～根子岳と真田町角間沢～烏帽子岳の2地域に産するシダを紹介している。

7-3『長野県植物誌』(1997)

長野県植物研究会の植物誌編纂事業として、20年をかけてまとめられた。標本に基づいた植物目録には3257分類群(品種を含まず)が記録された。上田小県地域に関する事項は、「長野県内12地区の植物地理」の項で、上田・更埴市、小県・更級・埴科地区として各地の植物の特徴などが記述されている。

7-4『長野県植物目録』(2017年版)

長野県植物目録編纂委員会(大塚孝一・星山耕一・藤田淳一・尾関雅章・石田祐子)により出版され、長野県の維管束植物4540分類群が記録された。目録の他に5編の報告があり、アザミの分布について、長野県植物誌ではナンブアザミとトネアザミは県下広く分布するとされたが、ここでは大町から菅平付近にかけての境界線で分布は南北に分かれ、上田小県地域ではトネアザミの分布が広いと考えられた。

7-5『長野県外来植物目録』(2018年版)

長野県外来植物目録編纂委員会(大塚孝一・星山耕一・尾関雅章・石田祐子)により出版され、長野県の外来植物621分類群が記録された。その内上小地方(上田小県地域)に記録がある種類は、195分類群としていて、特定外来生物として、オオキンケイギク、オオハンゴンソウ、アレチウリ、オオカワヂシャの4種が記録されている。

8. 上田小県地域がタイプ産地となった植物

長野県には著名な山岳が多く、浅間山、八ヶ岳、戸隠、白馬岳、御岳山、駒ヶ岳などそこに生える植物も魅力的で植物相も豊かなことから、交通が不便な時代から著名な植物学者が長野県を訪れ、新しく見いだされた植物が新種などとして発表されてきた。和名にアサマ、ヤツガタケ、トガクシ、シロウマなど地名を冠した植物も多い。新種などの新分類群を記載するときのタイプ標本(基準標本)が、長野県で採取された種類はシノニムとされるものもあるが450分類群を下らない。上田小県地域がタイプ産地である種類を、以下に和名、学名、出典、タイプ産地(標本採取者、年月日、収蔵庫)の順に記

した。上田小県地域で採取されたものは多くはないが、次の10分類群が知られる。タデスミレの産地は、Tanakaとある。カブダチナズナは、モイワナズナと同一とされるが、別とされることもある。当地名を冠した植物にはトウミトウヒレンがある。シロバナイクスミレの学名は望月精一に、トウミトウヒレンの学名は川上美保子に献名された。

カブダチナズナ *Draba shinanomontana* Ohwi, Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo no. 26: 8 (1949). Type: Nagano (Shinano), Iwahana, Shiojirimura in Chiisagatagun (M. Kitagawa, TNS). 標準 *Draba sachalinensis* (F. Schmidt) Trautv. var. *sachalinensis* モイワナズナ

シロバナシヨウキラン *Yoania japonica* Maxim. f. *alba* K. Imai, Bull. Bot. Soc. Nagano 28: 26 (1995). Type: Chiisagata-gun, Nagato-machi, Takayama (K. Imai SHIN 170012).

キンバイソウ *Trollius hondoensis* Nakai, B. M. T. 42: 8 (1928). Type: Syntypes: Nagano, Wadatoge (J. Matsumura, [23 Jul. 1880] TI); Mt. Tateshinayama (B. Hayata, [Aug. 1905] TI); Mt. Asamayama (K. Jo, [1 Aug. 1905] TI); Mt. Yatsugatake [Umagaeshi] (Y. Yabe, [18 Aug. 1902] TI); Mt. Komagatake (J. Matsumura, TI, q.e. T. shinanensis, fide Kadota (2016)); Gifu (Mino), Mt. Ibukiyama (J. Matsumura, 1 Aug. 1881, TI -Lecto. designated by Siplivinsky (1972: 70); J. Nikai, TI). アオナシ *Pyrus hondoensis* Nakai et Kikuchi, B. M. T. 32: 34 (1918). Type: Syntypes: Nagano, Chiisagatagun ('in districtu Ogata') (A. Kikuchi, TI); Mt. Fuji-san (A. Kikuchi, TI). 標準 *Pyrus ussuriensis* Maxim. var. *hondoensis* (Nakai et Kikuchi) Rehder

クロツバラ *Rhamnus davurica* Pall. var. *nipponica* Makino, B. M. T. 18: 98 (1904). Type: Syntypes: Tokyo (no data, TI); Bot. Gard. Koishikawa in Tokyo, cult. (coll.?, 18 May 1880, TI; T. Makino, Jun. 1896, MAK); near Katayama (R. Yatabe & J. Matsumura, 5 May 1881, TI); Shimura (T. Makino, 1888; 7 Sep. 1893; 22 May 1898 & 30 Oct. 1898, MAK); near Hachiozi (T. Makino, 28 Oct. 1899, MAK); near Kami-kunugida (T. Makino, Jun. 1901, MAK); near Asagawa (T. Makino, May 1902, MAK); Shimoshakushii (T. Makino, 20 May 1900, MAK); Nagano, Mt. Wada-toge (R. Yatabe &

- J.Matsumura, 10 Jul. 1884, MAK); Iwate (Mutsu), Fukuoka (R.Yatabe, 20 Aug. 1878, TI).
- シロバナイブキスミレ *Viola mirabilis* L. var. *subglabra* Ledeb. f. *seiichii* E.Hama, J. J. B. 51: 339 (1976). Type: Nagano, Chiisagata-gun, Nagato-machi (S.Mochizuki, 2 May 1967, Hb. Hama).
- タデスミレ *Viola thibaudieri* Franch. et Sav., EPJ 2: 290 (1878). Type: 'in Japonia, loco non indicato, ex bot. Jap. Tanaka' (Savater 99, P).
- イワカガミ *Schizocodon soldanelloides* Siebold et Zucc., Abh. Akad. Muench. 3(3): 723 (1843). Type citation: "Habitat in summis Japoniae montibus, v. g. in monte Nekodake".
- ヤチアザミ *Cirsium shinanense* T.Shimizu, Bull. Sugadaira Biol. Lab. no. 4: 4 (1971). Type: Nagano, Chiisagata-gun, Sanada-machi, Sugadaira, 1200-1300m, moor (T.Shimizu & K.Tsuchida 124, KYO).
- トウミトウヒレン *Saussurea mihokokawakami-ana* Kadota, J. J. B. 92: 77(2017). Type: Nagano, Tomi-shi, Asama Mountains, Mt. Kagonoto-yama (Y.Kadota 154206, 28 Aug. 2015, TNSO1270077-Holo).

9. 天然記念物に関する調査

長野県史蹟名勝天然記念物調査報告は、1923年(大正12年)より1951年(昭和26年)まで全28輯が発行された。内容は、史蹟、名勝、天然記念物の3区分がある。植物の天然記念物に関する内容を「長野県植物誌」の植物研究史で紹介しているので、上田小県地域に該当するものについて再録し、その当時の調査対象とされた植物を紹介する。著者はほぼ小山海太郎と八木貞夫の二人で、小泉秀雄の名も見られる。

以下は発行の輯・発行年、著者、タイトル、掲載ページ、末尾のカッコ内は概略である。

- 第2輯(1924 T 13) 小山海太郎: モイハナズナの産地 93-95 (岩鼻)、同: 名木としてのかやの木 96-97(カヤの大樹、樹高18m, 小県、祢津)、同: ツキヌキソウの自生地 97-101(分布、小県郡)、同: 野生の里芋 105-109(青木村)
- 第4輯(1925T14) 小泉秀雄: 珍種を産する鼠窟及半過の岩鼻 219-228(モイワナズナ、イワナデシコ、シンパク、ニラ、モモ、コカラマツ、ヒモ

カズラ等)

- 第7輯(1926T15) 小山海太郎: 上田市のハゴロモカシワ 81-83(カシワの変種、樹高5.4m)
- 第11輯(1930 S 5) 小山海太郎: 塩尻村のナンジャモンジャの木 157-159(フジキ、樹高9m, 上田)、同: 小県郡東塩田村通称「地頭木」に就いて 167-169(ケヤキの大樹、樹高18m)
- 第13輯(1932 S 7) 小山海太郎: 祢津村のハゴロモカシワ 316-318、上田神社の変わり楓 324-326(仮称エダガワリカエデ)
- 第14輯(1933 S 8) 小泉秀雄: 上田神社の「フタガタカエデ」(二型楓) 349-360
- 第17輯(1936 S 11) 小山海太郎: 白花のクサボケ 246-252(小県郡和村海善寺区)
- 第18輯(1937 S 12) 八木貞助: 小県郡滋野村西中屋敷の樺 133-125(ケヤキの大樹、樹高36m等2本)、同: 小県郡本原村表木神社の樺 135-136(ケヤキの大樹、樹高46m)、同: 小県郡本原村出早雄神社の樺 136-137(ケヤキの大樹、樹高40m等6本)
- 第19輯(1938 S 13) 八木貞助: 長村渋沢の枝垂栗 190-191(シダレグリ、樹高2m余)
- 第20輯(1939 S 14) 小山海太郎: 別所北向観音の桂 177-179(イチョウの雌木、樹高20m)
- 第21輯(1940 S 15) 小山海太郎: 菅平に於ける「石割のアオナシ」と「ツキヌキソウ」 97-100(アオナシ樹高10m, ツキヌキソウ群落)、同: 霊泉寺の大樺 101-102(ケヤキの大樹、樹高30.64m)
- 第23輯(1942 S 17) 八木貞助: 小県郡青木村豊受社の樅 145-147(モミの大樹、樹高16m, 先端は枯死)
- 第27輯(1949 S 24) 八木貞助: 蛇澤の大桑 122(クワの大樹、樹高9mに刈止め、2本あり)、同: 蛇澤の金明竹 124-124(キンメイチク、マダケの変種)

現在、天然記念物(植物)に指定されているのは以下のようなものである。栗田他「信州ふるさと市町村天然記念物」(2019)を参考にしてまとめた。

上田市: 国指定: 東内のシダレエノキ、西内のシダレグリ、県指定: 小泉、下塩尻及び南条の岩鼻、菅平のツキヌキソウ、市指定: 愛染カツラ、穴沢弾正塚の一本松、出早雄神社社叢、岩谷堂エドヒガン、大笹街道のシナノキ群、大日向の二形カエデ、大布施のヒガンザクラ、大星神社社叢、大宮諏訪神社のサワラの木、上田市材木町の桑の木、

高仙寺参道並木、駒形神社のトチの木、科野大宮社社叢、信廣寺のシダレザクラ、番匠のカツラ、南方荒野ジャクシン、山家神社社叢、大六のケヤキ、石割のアオナシ、天神宮のケヤキ、前山寺参道並木、ナンジャモンジャの木他。

東御市：県指定：宮ノ入のカヤ、市指定：白鳥神社社叢、大神宮の大桜、滋野稻荷神社のサイカチ、黒槐の木。

長和町：町指定：大枝垂桜、カヤの木、ツキヌキソウ。
青木村：県指定：杳掛温泉の野生里芋、村指定：滝山連山ブナ群落、大法寺の榎（かや）、西禅寺の榎、馬場神社の榎、光明寺跡の熊野杉、日吉神社の大杉、阿鳥川神社のしだれ桜。

謝辞

タデスミレの生態写真や標本写真の使用を許可していただいた坂口益次氏、小林武彦氏、文献の利用に協力していただいた若林富枝氏に感謝いたします。また、上田市立博物館及び高野美佳学芸員には館所蔵の横沢末木の人物写真の掲載許可及び資料収集に協力していただきました。東御市教育委員会文化財係堀田雄二、東御市文書館館長西沢浩、学芸員田中浩江の各氏には標本調査の許可をいただき、便宜を図ってくださいました。記して感謝いたします。

文献目録（配列は著者のABC順）

- 浅野一男・林一六・平林昌男・伊藤静夫・中山洌・清水建美・土田勝利 (1969) 菅平湿原の植物生態 I 植物社会、菅平高原生物実験所研究報告 (3): 11-28.
- 林一六 (1967) 菅平地方における植物遷移の研究 (1)、菅平高原生物実験所研究報告 (1): 1-18.
- 林一六・伊藤洋 (1985) 菅平の高等植物目録、筑波大学菅平高原実験センター.
- 星山耕一・川上美保子 (2017) 長野県東御市池の平周辺の植物相、長野県植物研究会誌第 46 号
- 飯沼冬彦 (1968) 菅平の蘚苔類について、pp.85-91、長野県衛生部薬務課・横内斎「菅平植物誌」.93pp., 長野県衛生部薬務課.
- 池田登志男 (2002) 千曲川原の植物の変遷、pp.48-53. 広瀬幸男・小川原禎寿・窪田英夫・池田登志男「千曲川の自然と今昔」、千曲 - 郷土の研究 - 第 112 号: 15-53.
- 池田登志男・川上美保子・渋沢美佐緒・篠原修・藤

倉佑子・富士田裕子・三井幸子・林一六 (2005) 長野県上田市産モイワナズナの生物学、長野県植物研究会誌第 38 号: 37-42.

門田裕一 (2017) アジア産トウヒレン属（キク科）の分類学的研究Ⅲ. 本州の 3 種、植物研究雑誌 92 号: 69-81. (英文)

川上美保子 (1997) 横沢末木氏採集植物標本目録、長野県植物研究会誌第 30 号: 59-62.

川上美保子 (2000) ため池斜面の植生、pp.82-85. 上田小県近現代史研究会ブックレット No.7「農業の文化財ため池をたずねる」98pp.

川上美保子 (2001) 千曲川の植物、pp.79-82. 上田小県近現代史研究会ブックレット No.8「千曲川のほとりを歩く」96pp.

川上美保子 (2015) アザミの話、上田・小県 182 号: 1-4. 小県上田教育会.

川上美保子 (2017) キク科トウヒレン属植物の話、上田・小県 189 号: 1-4. 小県上田教育会.

川上美保子 (2017) 長野県東御市湯の丸高原の植物相、長野県植物研究会誌第 50 号: 53-64.

川上美保子 (2018) キク科トウヒレン属の新種トウミトウヒレンについて、長野県植物研究会誌 第 51 号: 47-50.

川上美保子・藤倉佑子・渋沢美佐緒・霜田芳武・三井幸子 (2002) 塩田平におけるため池の堤の斜面植生 (1)、上田・小県 129 号: 1-2. 小県上田教育会.

川上美保子・藤倉佑子・渋沢美佐緒・霜田芳武・三井幸子 (2002) 塩田平におけるため池の堤の斜面植生 (2)、上田・小県 130 号: 2-3. 小県上田教育会.

倉島賢次郎 (1903) 烏帽子ヶ岳植物目録、信濃博物誌学雑誌第 7 号: 24-26.

倉島賢次郎 (1905) 四阿山附近の植物、信濃博物誌学雑誌第 18 号: 12-17.

栗田貞多男・伊久間幸広・市川董一郎 (2019) 信州ふるさと市町村天然記念物、信濃毎日新聞社.

黒田辰一郎 (1976) 菅平の薬草 75pp, 菅平研究会
河野冷蔵 (1930) 塩尻村のナンジャモンジャの木、長野県史蹟名勝天然記念物調査報告第 11 掲: 157-159.

小林規甫 (1965) 岩鼻の岩上植生、上小教育第 81 号: 50-56.

小山海太郎 (1940) 菅平に於ける「石割アヲナシ」と「ツキヌキソウ」、長野県史蹟名勝天然記念物調査報告第 21 掲: 97-100.

- 望月精一 (1973) 太郎山の植物. pp147-153, 上田小県誌第五巻資料補遺編 (二) 自然編.
- 望月精一 (1973) 上小地方のスミレ類. pp153-169, 上田小県誌第五巻資料補遺編 (二) 自然編.
- 本原小学校七十周年記念事業委員会 (1960) 本原の歴史, 本原小学校七十周年記念事業委員会.
- 長野県衛生部薬務課・横内斎 (1968) 菅平植物誌. 93pp., 長野県衛生部薬務課.
- 長野県植物目録編纂委員会 (2017) 長野県植物目録, 長野県植物目録編纂委員会.
- 長野県外来植物目録編纂委員会 (2018) 長野県外来植物目録, 長野県外来植物目録編纂委員会.
- 大塚孝一 (1974) 長野県上小地方のシダ植物.
- 大塚孝一 (1987) 長野県のシダ植物, 信毎書籍出版センター.
- 斎藤亀三 (1971) 菅平のコケ植物, 菅平高原生物実験所研究報告 (4): 11-30. (英文)
- 斎藤亀三 (1974) 菅平のコケ植物に追加する数種, 菅平高原生物実験所研究報告 (6): 9-10. (英文)
- 真田町教育委員会 (1990) 菅平高原誌, 真田町教育委員会.
- 塩野入忠雄 (1989) 千曲川中流地方の岩石の産状と観察, 信濃教育会出版部.
- 清水建美 (1974) 山の植物 I - 私のノートから -, 保育社.
- 清水建美 (1982) 植物の重要度からみた環境評価の試み, 信州の自然科学モニタリングと環境科学の総合化に関する研究 16-19.
- 清水建美 (1982) 自然環境保全地域候補地学術調査報告書 [虚空蔵山・半過], 長野県.
- 杉本順一 (1978) 日本草本植物総検索誌 I, 井上書店.
- 関谷圭史 (1986) 菅平高原の植物 - 観察の手引き - 121pp., 真田町立菅平高原自然館.
- Takaki, N (1943a) Bericht über Laubmoosflora von Sugadaira, prov. Sinano (1)., Journ.Japan.Bot. 19: 172-179. (高木典雄: 信州菅平産蘚類報告 其一)
- Takaki, N (1943b) Bericht über Laubmoosflora von Sugadaira, prov. Sinano (2)., Journ.Japan.Bot. 19: 404-413. (高木典雄: 信州菅平産蘚類報告 其二)
- 高野豊文・安藤裕編集 (1964) 菅平その自然と人文, 菅平研究会 (増改版)
- 高野豊文・安藤裕編集 (1965) 続菅平その自然と人文, 菅平研究会.
- 横内斎 (1956) 美ヶ原の植物, 長野林友 no. 10: 76-81.
- 横内斎 (1956) 美ヶ原の植物 (2), 長野林友 no. 11: 81-88.
- 横内斎 (1968) 美ヶ原の植物, 美ヶ原観光連盟.
- 横内斎 (1968) 菅平高原の植物, 長野県植物研究会誌 1 号: 24-28.
- 横内斎 (1971) 長野県の植物, 信濃教育会出版部.
- 郡誌・市町村誌等
- 上田小県誌第四巻自然編、^{おさむら}長村誌 (1967)、東部町町誌 (1989)、武石村誌 (1989)、丸子町誌 (1989)、青木村誌 (1993)、真田町誌 (1997)、上田市誌 (2001)
- 上田市立博物館郷土誌シリーズ: 『郷土の自然 上田附近の植物』 (1989)
- 上田市立信濃国分寺資料館 (2003) 『上田地方の万葉植物』
- その他「長野県植物研究会誌」に発表された論文等 (年代順)
- 望月精一 (1984) 上小地方に初記録のシダ 3 種, 17 号: 31.
- 白井幸長 (1995) 丸子町のシダレエノキ, 28 号: 7.
- 白井幸長 (1995) 上田染谷丘高校のフジバカマ, 28 号: 8.
- 池田登志男 (1996) 夏季例会合宿調査報告 湯の丸山・烏帽子岳の植物観察, 29 号: 57-58.
- 目沢民雄・遠藤信元 (1998) 長野県菅平におけるオキナグサの調査報告, 31 号: 38-39.
- 井田秀行・川上美保子 (2002) 菅平高原大洞地区に残存するブナ孤立林の森林構造, 35 号: 16-24.
- 川上美保子・海野芙美子・小野遊子・越石俊江・染野俊哉・渋沢美佐緒・野口喜久子・野々村孝子・村山顕・染屋の森の会 (2005) 長野県青木村のブナ群落, 38 号: 33-35.
- 川上美保子 (2007) 上田市舞田峠におけるアカマツ伐採跡地の植生変化, 40 号: 15-18.
- 原千枝子・川上美保子 (2009) 上田市大洞ブナ林と蝶が原林道方面植物観察会 (190・191 例会) 報告, 42 号: 101-107.
- 加藤順・林一六 (2016) 長野県上田市におけるアカマツ林伐採跡地の植生回復とコナラ林の成長, 49 号: 17-22.